



暮らしの中に神社があった。

り。神との結びつきの原点は、ここだ。そして、神社の存在そのものが、これだと思ふ。

菊陽町大字原水小字堀川。南北に細長く伸びた集落。その長い道すじに、小さな神社がある。うっかりすると、見落してしまいうような、そんな小さな神社なのだ。

ここに、土地の人たちをしつかりと結びつける、大きな絆があった。

菊陽町
安武 嵩さん(89歳)
和夫さん(54歳)
卓明さん(23歳)



祈り。それは、もともとが、原始的なものであった。手を合わせ、神と対話をする。フツと、心が静かになる。ざわざわと粟立っていた体の奥底の不安が消え平穏になれる。そのための、祈

蘇古鶴神社。一六三五年。寛永十七年。細川忠利公により建立された。祭神は、健甕命(たけいわたつのみこと)。

代々、安武家が蘇古鶴神社を守ってきた。

「守る、というような、そんな義務的な気持は、ないですね。この蘇古鶴神社に生まれ育って、土地の皆さんと、毎日接してきていると、皆さんの平穏無事な暮らしを願いながら生活するというのが、ひとつの使命なんだ。そんな気がしてね。」と、現在合志南小学校で、教頭の要職も勤められる安武和夫さん。

親子三代の神主さんが、祭礼をつかさどっておられる。その意味でも、かなり珍しい神社と言える。

和夫さんの父親、嵩さんは、八十九歳。土地の人から、「先生」と呼ば

れ敬れている方だ。

和夫さんの息子さん、卓明さん。東京の国学院大学を卒業後、現在、芦北養護学校に勤務。時折、帰省して親子三人揃って、神事を行う。鉄砲小路は、わずか百四十戸の集落である。この土地の人々と、安武家のつながりは深く、そして温かい。

例えば、元日。除夜の鐘を聞きながら、人々は続々と神社に集まる。嵩さんらに、新年の挨拶をし、神の前で手を合わせ、一年の無事を祈る。これがあって、はじめて年が明けるといふ。形式とか、単なる儀式ではない。生活の一部としての、初詣なのである。

今年、土地の人たちを中心に、三百年祭という大祭が行われた。自分たちの神社の誕生を、自分たちの手で、素朴に祝うという祭りであった。その日、自然なカタチで、喜びが爆発した。踊り、唄い、手をたたき、笑う。このことで、人々はまたひとつ連帯感を深めていく。神社を中心に、まとまっていく。

菊陽町は、テクノポリス圏域のひとつの拠点でもある。その中の蘇古鶴神社。どんな役割を果たしてい



卓明さん くだらうか。
卓明さん

和夫さん

嵩さん

景は、変わるかもしれない。でもたぶん、土地の人の心は変わらないと思う。皆さんが仲良くまとまって生活していくために役に立てれば、それでいい。今はね、そんな気持ちなんです。三人の共通した気持ちだと思ふ。日曜日の朝九時。子供たちが集まってくる。境内の掃除をするのだ。週一度の、小さな労働奉仕なのである。もう、長いこと続けられている。ここで、彼らは、ごく自然に、神に触れる。敬うことを知る。無心に動く小さな手。小さな瞳。未来へ、未来へ。神社との絆が、ゆつくりと練りあがっていく。

